

落合芳幾の役者絵研究

— 『歌舞伎新報』 所載の表紙絵、挿絵、口絵を中心に —

A study on the actor's picture of OCHIAI Yoshiiku

菅原 真弓 *Mayumi Sugawara*

(芸術学部)

1. はじめに
2. 雑誌『歌舞伎新報』と芳幾
3. 芳幾描く『歌舞伎新報』所載の口絵、錦絵
4. おわりに

1. はじめに

落合芳幾（おちあい・よしいく：天保4年～明治37年/1833-1904）は、明治期を代表する浮世絵師の一人である。幕末の浮世絵師歌川国芳（1797-1861）門下の俊秀として、同門の月岡芳年（1839-92）と並び称された存在であり、ライバルでもあった。

芳幾について語る場合、まず芳年との共作である「英名二十八衆句」（慶応2、3年/1866, 67）が取り上げられる。これは彼の代表作の一つであり、いわゆる「血みどろ絵」の代表的な作例であるからだ。また維新後の芳幾は、東京初の日刊紙『東京日日新聞』の創刊（明治5年/1872）に参加した新聞人の一人でもあった。さらに、新聞記事を錦絵化して出版した新聞錦絵（錦絵新聞）という媒体を創始し、また浮世絵師たちが担当する新聞挿絵という新しい分野を切り拓いた存在でもある¹⁾。

芳幾や芳年の弟子世代の浮世絵師たち、たとえば芳年の弟子水野年方（1866-1908）や右田年英（1863-1925）らが、発表の媒体を一枚ものの錦絵から徐々に新聞や雑誌の挿絵へと転じていった事を思えば²⁾、芳幾は次世代の浮世絵師たちの活路を拓いた存在と言ってよい。

しかし芳幾は、既にいくつかの拙稿で述べてきたように³⁾、同時期の浮世絵師たち、たとえば先に挙げた月岡芳年や豊原国周（1835-1900）、小林清親（1847-1915）と較べてもなお、研究蓄積は薄く注目度は低い。そして残念ながら、これまで個展も開催されていない。一方、美術史の分野ではなく、近代国文学研究、特に明治初期の新聞や雑誌とそこに掲載された小説などに関する研究では、芳幾を中心に据えた論考では決してないものの、しばしば名前が散見される存在でもある⁴⁾。

『東京日日新聞』の創刊に携わって以降の芳幾は、新聞人、あるいはもっと広く出版人として評価すべきなのかもしれない。前述した「東京日日新聞」錦絵（明治7年）に続き、明治8年（1875）4月、『東京日日新聞』の記者であった高島藍泉（1838-85）と共

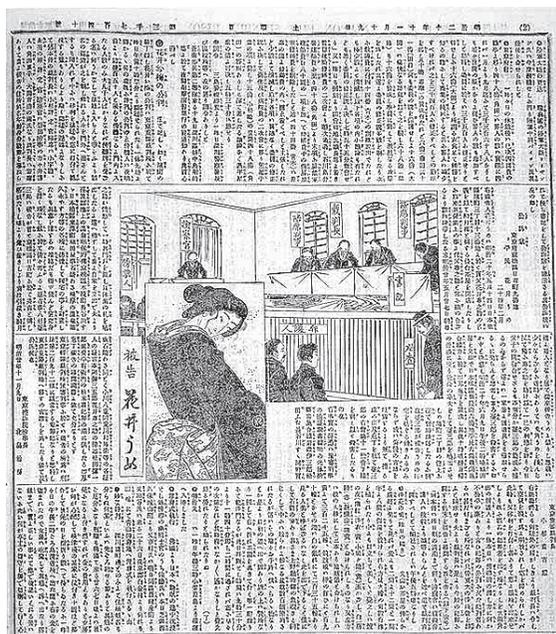


図1 『東京絵入新聞』明治20年11月19日号紙面『ニュースの誕生』東京大学総合資料館、1999年より転載

に、自ら社主となって『平仮名絵入新聞』（同年9月より『東京平仮名絵入新聞』、翌明治9年3月より『東京絵入新聞』と改称）を創刊し、自ら挿絵を手掛けているが、これが新聞に本格的な挿絵を入れた最初の事例となっているからだ⁵⁾。金属活字の紙面に挿絵の版木を組み込んだ印刷手法は画期的なものであった⁶⁾。江戸時代の小説本——読本や合巻——に挿絵を描くことは、浮世絵師たちの主たる仕事の一つであったから、芳幾にとって新聞という報道媒体の紙面に挿絵を付すのは、その延長線上にあったのかもしれない。明治20年11月19日号の『東京絵入新聞』の紙面（図1）を見てみよう。これは「明治一代女」の名で戯曲にもなった毒婦花井お梅の裁判風景を描いたものである。三段抜きの大らかなスペースに法廷の様子とお梅の半身像が配置される。実際に法廷での取材を行ったか否かは不明であり、お梅はいわゆる浮世絵美人として描出されている。しかしながらこれは実際の事件の報道内容を補足するために付されたヴィジュアルイメージであり、文字のみのニュースよりも遥かに読者の興味関心を誘ったであろうことは間違いない。

さて本稿では、出版人としての芳幾にとって、前述の「東京日日新聞」錦絵に加えて、もう一つの大きな仕事である『歌舞伎新報』を取り上げる。ここで芳幾は自ら筆を執り俳優の似顔絵を描いているからである⁷⁾。明治12年に創刊したこの雑誌は、実に18年の長きに渡り刊行を続け、通号1669号を数える。あまりにも大部なためか、これまでこの雑誌に掲載された芳幾作品について検討した先行研究はない。概略のみを述べるにとどまってしまう恐れはあるが、些か私見を述べていく事とする。

2. 雑誌『歌舞伎新報』と芳幾

(1) 『歌舞伎新報』について

『歌舞伎新報』は、明治12年（1879）2月3日に創刊した雑誌である。現存資料では縦22.2×横15.0程度の半紙本の体裁となる⁸⁾。第一号の表紙（図2）によれば、発行は歌舞伎新報社（京橋区銀座四丁目十六番地）、「新作筋書」などを載せ、「毎月三号宛」刊行すると謳っている。編集主任は、戯作者、歌舞伎作者である久保田彦作（1846-98）が担い⁹⁾、創刊号の表紙絵を手掛けたのは、三代目鳥居清満（1833-92）であった。創刊号には、当時著名の役者たちや戯作者たちも祝辞を寄せており、冒頭には尾上菊五郎（五代目）や市川左団次、市川團十郎（九代目）ら六名の役者たちが「歌舞伎新報発兌の御披露」と題した挨拶を記す。



図2 『歌舞伎新報』創刊号表紙 明治12年2月3日

歌舞伎新報発兌の御披露 尾上菊五郎
市川左団次
中村仲蔵
中村宗十郎
岩井半四郎
市川團十郎

（菊）そも文華開けてより新聞雑誌三十余种新奇を競ふ中に独り劇場の記事を載る
いまだ新紙を見ざりしに（左）今度好事の君達が歌舞伎と題す新報を爰に発兌の挙あ
ると聞まつ魁に六人一座初号へ顔をつん出して（仲）老鶯のほふホケ今日待つ甲斐あ
りて発行の初音をきいて若がへり羽根を縮めた秀鶴も此初刷へ腰を伸し年礼ならぬ初
披露（宗）扇は家号の末広がり其刷高も幾万枚数を重ねて初霞棚引く空の幕内から及
ばずながら是からは投書の数へ組入の（半）三升さんがお頼みゆえ家に伝へる随筆や
故人の遺書の反故を集め一編ごとに寄書の欄へ岩井の水ぐきは拙いこと、お叱りなく
（団）其編輯の名に背かず南三升や見連を両の翼と九万里へ一時に声価を揚幕から楽
屋のあなを仮名垣翁流れよどまぬ河竹瀬川（菊）いづれも当時の顔揃ひ（左）筆を揮
へば（仲）外に敵なし（宗）其繁昌は（半）私しが保證（団）隅からすみへ（菊）御
愛顧をお馴染様へ（団）ホ、敬白（六人）冀ふ

※文中（菊）（左）などとあるのは図中にあるそれぞれの役者の印



図3 『歌舞伎新報』第七号表紙 明治
12年4月4日

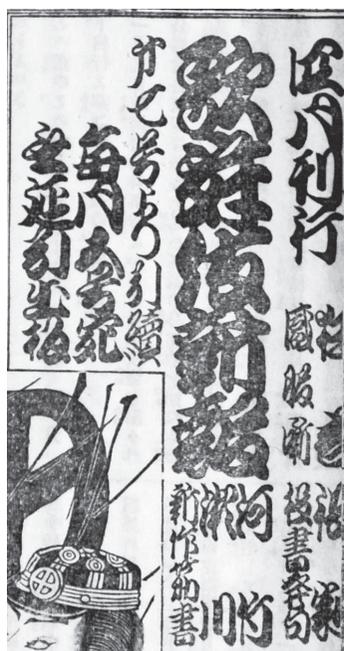


図3部分

雑誌という新しい媒体で、江戸以来の歌舞伎が取り上げられることに対する期待感がこもった挨拶と言えよう。歌舞伎界の期待は裏切られなかったようで、当初、毎月三号刊行を予定していたにもかかわらず、早くも7号（明治12年4月）からは「毎月五号」（図3、同部分）、そして781号（明治20年5月）からは「毎月十号」へと増え続ける。刊行頻度の高さはすなわち需要の高さと考えてよいだろう。これが刊行当初の「毎月三号」のペースに戻るのには、明治28年8月の全面リニューアル（1613号）を待たねばならない。但しこのリニューアルにあたっては、表紙デザインやヴィジュアルイメージの扱い、そして丁数（ページ数）を含めた構成も全面的に刷新している。デザインや構成などについては後述する。

【資料1】を参照されたい。これは創刊から廃刊までの期間の月次の刊行冊数とその号数を記したものだ。これを見ると、月に五号刊行としていた明治12年4月から明治20年4月の間、明治12、13年中はほぼ月次5冊刊行であるものの、徐々に刊行冊数が増えていっていることがわかる。明治16年からは予定の5冊でとどまった月はなく、最も多い時は月次13冊に及んでいる（明治17年11月、明治18年5月）。最も数多く刊行されたのは明治17年の125冊で、3日間に一冊のペースであったことがわかる。その当時がこの雑誌の最盛期と言えよう。後述する編集方針の変更がわざわざしたのか、明治27年10月30日刊行の1609号を以て一時休刊し、翌28年3月3日に復刊。しかし3月に2冊、翌4月に1冊刊行した後は再び休刊することになる。同年8月2日刊行の1613号からは、表紙

デザインや構成など全てを刷新して再出発し、ここから廃刊となる1669号（第二巻第六号、明治30年3月12日）までは月次3冊刊行が定着する。

創刊当初のページ構成は、表紙+五丁（全12頁）としており、これは明治24年12月刊行の1320号まで継続する。翌25年1月刊行の1321号からは表紙+六丁へ、そして明治28年8月刊行の1613号で全面リニューアルを行った際、表紙+20丁へと大幅に増加する。ちなみに、たとえば久松座の新築（8号、明治12年4月）などのニュースを伝えたり、新年号などの場合は一時的に増ページを行っている。なお、明治28年8月の大規模改変に伴い、創刊時から発行してきた歌舞伎新報社に代わり、玄鹿館が発行社となっている（歌舞伎新報社は編集部局として継続）。

掲載内容について。当初は興行予定の演目の筋書き（正本¹⁰）に加え、「雑録」として劇界のニュースを一部載せる程度であったが、徐々に内容の充実をはかっているに至る。しかしこの筋書きが文字化されて公刊されるということが、この雑誌の最も大きな価値であったという。「歌舞伎の正本」が容易には手に入らない状況のなかで、『歌舞伎新報』の筋書は数少ない〈読む芝居〉としての価値を売り物とした」と指摘される¹¹。なお1071号（明治22年11月）からは連載小説をスタートさせており¹²、また明治25年新年号（1321号）からは、歌舞伎に限らず「諸演芸」に関する論説や欧米諸作の翻訳、批評などを載せる改良を行うとの社告（歌舞伎新報大改良広告）を掲載している（図4）。その成果としてはたとえば、森鷗外の寄稿「答 某論劇評故実書」（1537号、明治27年1月）を挙げる事ができる¹³だろうか。

明治25年正月の大規模な編集方針変更は、創刊当初以来の編集主任であった久保田彦作の退社を意味していた。この号からは久保田に代わって宮崎三昧、三木竹二、鈴木得知、岡野碩が編集担当となっている。さらに1538号（明治27年1月12日）の社告には「当春よりは従来の社員尾崎紅葉、岡野紫水、山田美妙、幸田露伴、宮崎三昧、三木竹二、森鷗外の他にこの度関根黙庵其他二人更に入社致し爾来社務拡張可仕心得に御座候」と載る。当初の編集者が戯作者、歌舞伎作者であった久保田彦作であったのに対し、ここに記された編集担当者たちの顔ぶれを見ると、江戸以来の歌舞伎周辺の人物ではなく、文学者や演劇評論家たちであったことがわかる。時代の流れと言うべきなのだろうが、創刊以来、江戸の名残りの香を漂わせてきたこの雑誌が、徐々に近代的な雑誌の体裁を整えてきた結果、廃刊になったと見ることもあるいは可能かもしれない。

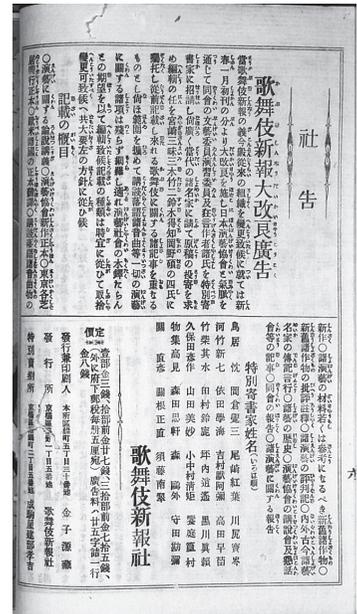


図4 『歌舞伎新報』第千三百二十一号社告 明治25年1月8日

(2) 『歌舞伎新報』のヴィジュアルイメージ

(2)-1 表紙デザイン

『歌舞伎新報』の当初の表紙は、創刊号(図2)を見てもわかる通り、右上に冊子体の枠を設けて雑誌タイトルと目次、右下には発行者、左上に号数、そして左下の四角枠内に役者絵を配するというスタイルであった。この全面の背景として花卉が描かれる。第一号の表紙は、前述の通り鳥居清満(三代目、1833-92)。役者絵を表紙とする形式は一時中止されたが(1367-1400号、明治25年)断続的に続き、明治28年3月刊行の1610号まで継続していくこととなる。

初期の表紙絵は清満に加えて鳥居清種(1830-90)や鳥居清貞(1844-1901)が担当しているが、49号(明治12年12月)の表紙に初めて、落合芳幾が登場する(図5、同部分)。**【資料2】**を参照されたい。この資料は、『歌舞伎新報』の表紙絵、挿絵、そして口絵(1613-1627号、明治28年)、錦絵附録(1628-1669号、明治29-30年)を担当した絵師たちを、担当した順に列挙し、担当した号を記したものだ。これを見ると、落合芳幾が挿絵を担当したのは1191冊にのぼることがわかる。役者絵表紙によるこの雑誌の刊行冊数は1576冊であるから、実に75%を担当したことになる¹⁴⁾。表紙絵を担当した絵師たちの中にはたとえば歌川国鶴の門人歌川国松(1855-1944)や明治の文人高島藍泉(三代目柳亭種彦)の息である兼彦(生没年不詳)といった、現在ではなかなかその作品を目にする機会が少ない絵師や、月岡芳年門下の右田年英(1863-1925)の名も見出すことができ、明治後の浮世絵師たちの活躍の場を、こうした雑誌が担っていたことが窺われる。



図5 『歌舞伎新報』第四十九号表紙
明治12年12月12日



図5部分



図6 『歌舞伎新報』第千二百四号
表紙 明治24年1月4日



図7 『歌舞伎新報』第千二百四号附
録「歌舞伎新報初刷附録/わら
ひぞめ」明治24年1月2日

表紙のスタイルは役者絵表紙の形式が中断される1366号までほぼ同一だが、明治24年1月刊行の1204号で、初めて色摺の表紙が登場する(図6)。しかし色数はコストの問題からか制限され概ね二色程度にとどまった。なおこの号は新年号ということもあり、多色刷りの附録「歌舞伎新報初刷附録/わらひぞめ」(図7)も添えられて読者の興味関心を誘っている。

このように継続してきた役者絵による表紙デザインだが¹⁵⁾、明治25年5月刊行の1367号で大々的に変化を遂げ(図8)、切り絵風の蝶をあしらったシンプルな二色摺りの意匠となる。そして表紙には雑誌タイトルと号数のみが記され、この号よりは裏表紙に目次が掲載されるようになるのである。私たちが現在思い描く雑誌らしい体裁により近づいたと言ってよいだろう。しかしこの表紙の評判は芳しくなかったのか、4か月を経た同年9月(1401号～)には再び役者絵による表紙が復活することとなる。但し、先述の表紙デザインの改変に伴って裏面に目次が新設されたこともあり、表紙に記されるテキストは改変時を踏襲し、表紙「絵」としてより楽しめる鑑賞性の獲得に努めた¹⁶⁾。こうした役者絵による表紙のうち、最も華やかなものは発刊1500号(明治26年8月)を記念した多色刷りの表紙であろう(図9)。これに先



図8 『歌舞伎新報』第千三百六十
七号表紙 明治25年5月23日

立つ1492号(同年7月)には、末尾掲載の社告の中でこれを大々的に宣伝している。

(略) 第千五百号発行祝ひのためその号の紙上にはこの度市川家の承諾を得て去る三月歌舞伎座にて興行せし黒手組助六の自家本元市川家歌舞伎十八番の一花川戸助六の正本を掲げ表紙は例の本社の特有極彩色の似顔絵を最も美麗に摺立てその他尚種々の新趣向を出し可申候(略)

※傍線は引用者。なお適宜字体を改変した。

この号以降、しばしば多色刷りの役者絵表紙を採用し、10号に1冊は多色刷りの表紙での刊行を宣伝するなど、充実した内容の読み物(雑誌)の機能に錦絵鑑賞の楽しみを加えた媒体として、この雑誌の存続をはかっている様子が窺える¹⁷⁾。

けれども、前項で述べた編集方針の変更が災いしたのか、あるいはこの雑誌が時代にそぐわない存在となってきたのかは不明だが、1609号を刊行した明治27年10月からは半年間の休刊を余儀なくされる。また復刊した翌年3月に1冊、4月に1冊を出した後、再び7月まで休刊することになってしまう。復刊後の1610号(28年3月)は、満を持してのことと思われるが、表紙絵も挿絵も多色刷りの美しい体裁としている。しかしこれをおそらくは失敗と判断したか、1611号以降は役者絵による表紙を廃止し、再復刊の1613号(同年8月)からは表紙を含めた全面リニューアルを行っている。再復刊号の表紙(図10)は、色紙型に雑誌タイトルと号数を配した瀟洒なデザインとなり、紙も厚くなっている。次項で述べるが、このリニューアルに際して挿絵を廃して多色刷りの口絵を採用し、加えて写真版の挿図も加えている。さらに翌明治29年新年号(1628号)からは再び表紙デザインを変更した(図11)。定式幕に松を配し、そこに雑誌タイトルを記すものであったが、廃刊間近となった1664号(明治30年新年号)に至って、さらに表紙デザインを変更している(図12)。朱と緑の二色刷りで土坡に流水、そして四季の草花を表現したものである。



図9 『歌舞伎新報』第千五百号表紙
明治26年8月17日

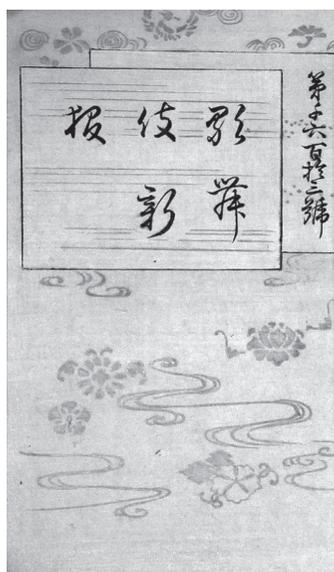


図10 『歌舞伎新報』第千六百十三号表紙
明治28年8月2日

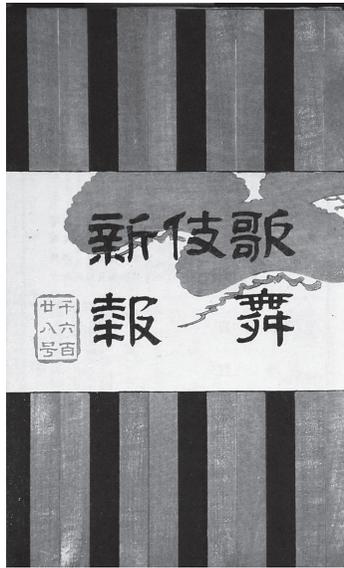


図11 『歌舞伎新報』第千六百二十八号表紙 明治29年1月10日



図12 『歌舞伎新報』第千六百六十四号表紙 明治30年1月11日

(2)-2 挿絵や附録、口絵など

歌舞伎の筋書きをテキスト（正本）として公刊することが、この雑誌の当初からの趣旨であったが、たとえば江戸期の読本や合巻などの読み物がそうであったように、そこにはやはり挿絵というヴィジュアルイメージが必要とされた。新聞といい、雑誌といい、当時の読者にとっては、読本や草双紙の延長線上の存在として認識していたと想像されるからだ。挿絵は創刊当初から綴じ込まれているが、活字印刷された

テキストの片面、一紙の半分（半丁）分を充てている場合が多い。これは活字印刷をする部分と木版の部分とを明確に分けることになり、作業効率が高えられる手段であったと思われる。しかし芳幾描く672号の挿絵（図13）を見ると、この原則が打ち破られていることが判明する。活字印刷と木版挿絵が一枚の紙面に混在しているからだ。このような挿絵の展開方法が、



図13 『歌舞伎新報』第六百七十二号挿絵（芳幾） 明治19年6月19日



図14 歌川国貞『修紫田舎源氏』第十一編挿絵、天保5年(1834)、
国立国会図書館蔵(同館デジタル化資料より転載)

たとえば江戸期の草双紙に見られる(図14)ことは誰もが思い浮かべることができよう。芳幾が範としたのは、おそらくこのような挿絵だったろうと思われるのだが、これを活字印刷の紙面で行っているのは注目すべき事柄である。しかし芳幾は自らが創刊した『平仮名絵入新聞』の創刊号(明治8年4月17日)紙面において、既に活字印刷の紙面に挿絵の版木を組み込んでいる(図1)¹⁸⁾。ここで挙げている挿図は遙か後年、明治20年の記事とその挿絵であるが、創刊当時よりこのように活字印刷と木版の挿絵の共存に成功した芳幾ならば、『歌舞伎新報』の挿絵にその技術を援用することは容易かったであろう。但し先に述べた多色刷りの挿絵に関しては、その例に入れることはできない。『歌舞伎新報』は、極彩色の錦絵を見慣れた読者層への配慮からか、かなり早い時期から彩色の挿絵を導入しており、最も早いものでは658号(明治19年5月)に見られる。また挿絵に加え、たとえば新年号に付す附録などにも多色刷りは用いられている(図7)。一方、新技術であった石版画の挿絵も見ることができる。早い例では明治22年11月10日刊行の1065号がある。ここには、通常の判サイズよりも大きな紙を用いた折り込みとして歌舞伎座の記事と石版画の挿図を載せている(図15、同部分)。歌舞伎座は同年同月21日の開業を予定していた。

木版ではなく活字版とし、木版挿絵に加えて新時代のビジュアル

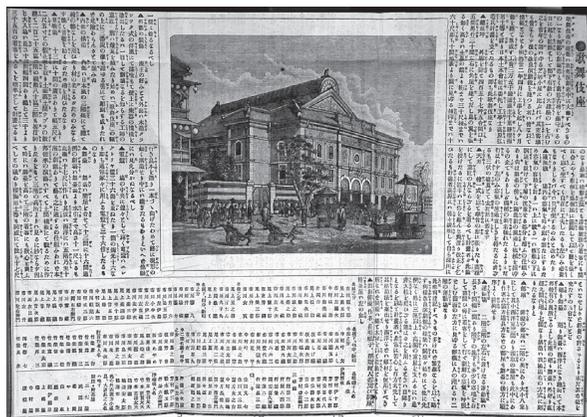


図15 『歌舞伎新報』第千六十五号折り込み 明治22年11月10日



図15部分

である石版画挿図を加えたとは言え、やはり江戸の草双紙様のイメージをまとってきた『歌舞伎新報』だが、先にも記した1613号（明治28年8月）の大規模なりニューアル後は、20丁（40頁）構成と変わり、本格的な雑誌の体裁をとるに至る。その際に導入されたのは、多色摺版画による見開きの口絵や写真版による挿図（図16）であり、さらに1628号（明治29年1月）以降は附録として錦絵が綴じ込まれていくこととなる。いわゆる錦絵の大判（約26.5×39cm）よりはサイズは小さいが、極彩色の絵画作品を手軽に楽しめるのは、この雑誌の大きな魅力であったろう。近代的な雑誌の体裁をとりながら、なおかつ江戸以来の歌舞伎ファン、役者絵ファンを満足させんとする、編集側としては苦肉の策であったかもしれない。



図16 『歌舞伎新報』第千六百十四号写真挿図（「関の扉」）明治28年8月15日

3. 芳幾描く『歌舞伎新報』所載の口絵、錦絵

「東京日日新聞」の錦絵（明治7年）以降、錦絵という媒体には殆ど筆を執らなかった芳幾であるが、『歌舞伎新報』の紙面では、表紙絵や挿絵のみならず、口絵や錦絵附録の多くを担当していることは、既述の通りである（【資料2】参照）。明治28年8月、1613号の改変以降導入された口絵の全て、そして1628号以降の錦絵附録も七割以上が芳幾の筆になるものだ。1613号の改変時に導入された口絵は、極彩色の華麗なもので、通常の錦絵よりもやや厚みのある紙に摺られている。口絵導入後初の1613号口絵（図17）では、やや挿絵的で場面説明に終始した絵柄となっているが、その後は、場面説明を極力排し、相対する二人、あるいは一人立ちの役者半身像を画面上に大きく描き出すに至っている。複数枚続きの画面に、役者の半身像を大きく描く構図（大首絵）は、芳幾と同世代の絵師、豊原国周が創始したものであるが¹⁹⁾、芳幾はこれに倣い、冊子見開きの画面を錦絵の二枚続のように用いている。

芳幾が描いた口絵は以下の通り。表記は同誌の目次のそれを採用し、適宜補足した。

- ・ 1613号：8/2 御存幡随長兵衛 市川團十郎の長兵衛、権十郎の権八 (図17)
- ・ 1614号：8/15 (千本桜) 権太 (菊五郎)、お里 ((中村) 福助)
- ・ 1615号：8/25 市川家代々肖像画の内 (才牛、柏筵、三升) 初代から三代
- ・ 1616号：9/7 市川家代々肖像彩色摺の内 (四代目、五代目、六代目)
- ・ 1617号：9/15 市川左団次丈 (九郎兵衛)、坂東秀調丈 (お小夜)
- ・ 1618号：9/25 市川家代々肖像錦絵の中 (七代目以下九代目迄)
- ・ 1619号：10/5 須磨組討彩色摺 熊谷 (團十郎丈) 敦盛 (米蔵丈)
- ・ 1620号：10/15 大杯觴酒戦強者、原才助 (左団次)、井伊直孝 (権十郎)
- ・ 1621号：10/29 指物師名人長次 (菊五郎) 娘おしま (福助) の錦絵 (図21)
- ・ 1622号：11/8 市川團十郎丈の暫 (彩色) (図18)

特に1622号の「市川團十郎丈の暫」は摺りの美しさが楽しめる一図。團十郎家の家紋三升紋を意識した枠が施された画中には、さらに三升紋を空摺で施し、これが地模様になっている。さらにこの上に雲英をまき、画面がキラキラと輝く。暫を演じる團十郎のみが描かれているが、短縮法を用いた斬新な構図となっている。同時期に刊行された豊原国周「歌舞伎十八番之内 暫 市川團十郎」(図19)よりもむしろ、計算された構図であることが分かる。

なお本冊には「暫」の正本が別冊として綴じ込まれている。刊行は同年11月12日。1622号の末尾には社告として、この本の宣伝が記されているが、その中に表紙絵についても「(略) 上半紙石版摺又表紙は奉書にて三升到牡丹の彩色画」と触れている。

- ・ 1623号：11/18 宮内の局 (團十郎) 木村重成 (新蔵) の彩色絵
- ・ 1624号：11/30 唐木政右衛門 (市川八百蔵) 和田志津摩 (市川染五郎)
- ・ 1625号：12/9 助平 (猿之助) お袖 (女寅)



図17 『歌舞伎新報』第千六百十三号口絵 芳幾
「御存幡随長兵衛 團十郎の長兵衛、権十郎の権八」 明治28年8月2日



図18 『歌舞伎新報』第千六百二十二号口絵 「市川團十郎丈の暫」 明治28年11月8日



図19 豊原国周「歌舞伎十八番之内 暫 市川團十郎」明治28年

- ・ 1626号：12/19 家康（團十郎）長三郎（猿蔵）（図23）
- ・ 1627号：12/30 箱屋兼松（松助）新富座興行第二等得点技芸優秀者、幸兵衛女房おりう（秀調）同三等

続く1628号（明治29年1月10日）からは「口絵」としてではなく、「錦絵附録」と目次に記される彩色版画²⁰が付せられるようになる。附録となった最初の号である1628号では、それまでの口絵の見開き画面に一枚加えた大きなものになっているが、次号からは口絵時代と同一の見開き画面に戻っている。

錦絵附録は以下の通りである。こちらも表記は目次のそれを援用した。

- ・ 1628号：1/10 芳幾「團十郎、菊五郎、左団次、丑之助の靉猿」（図20）
附録に変更してから初の、しかも新年号だけに、賑やかな画面になっている。
- ・ 1629号：1/21 芳幾「狐忠信（菊五郎）」
- ・ 1630号：1/28 芳幾「白拍子花子（團十郎）」
- ・ 1631号：2/5 芳幾「明治座興行鳥居前の福助丈（義経）忠信（菊五郎丈）」
- ・ 1632号：2/15 右田年英「殿下秀吉公（権十郎丈）主計頭清正（團十郎丈）」



図20 『歌舞伎新報』第千六百二十八号錦絵附録 芳幾「團十郎、菊五郎、左団次、丑之助の靉猿」明治29年1月10日

- ・ 1633号：2/25 芳幾「明治座三月興行源蔵（團十郎丈）松王（菊五郎丈）」
- ・ 1634号：3/5 芳幾「明治座興行石川五右衛門（團十郎丈）羽柴秀吉（菊五郎丈）」
見開き画面を用いているのだが、ここでは冊子を縦に置いた縦長構図で描かれており、興味深い。かの『北斎漫画』が取った縦構図を想起させる。
- ・ 1635号：3/15 芳幾「都座興行五三桐宋蘇卿（九蔵丈）石川五右衛門（芝翫丈）」
- ・ 1636号：3/26 芳幾「明治座興行猿廻し與次郎（菊五郎丈）伝平（菊之助丈）お俊（栄三郎丈）」
- ・ 1637号：4/10 芳幾「明治座興行石田の局（團十郎丈）久次（権十郎丈）」
- ・ 1638号：4/17 芳幾「市村座興行知盛（九蔵丈）義経（訥升丈）」
- ・ 1639号：4/25 芳幾「明治座興行丹吾兵衛（市蔵丈）菖蒲の方（秀調丈）佐馬之助光俊（菊五郎丈）」
- ・ 1640号：5/8 豊原国周「歌舞伎座興行助六（團十郎丈）自吟自筆」
- ・ 1641号：5/20 芳幾「歌舞伎座興行入道浄海（八百蔵丈）小松内府重盛（團十郎丈）」
- ・ 1642号：5/29 芳幾「まむしの次郎吉（菊五郎丈）うはばみ久太（松助丈）」
- ・ 1643号：6/9 国周「小姓彌生（團十郎丈）東雲（菊五郎丈）敷浪（福助丈）」
- ・ 1644号：6/20 芳幾「毛剃九右衛門一人立（團十郎丈）」
- ・ 1645号：6/29 芳幾「福岡貢（菊五郎丈）おこん（栄三郎丈）」(図25)
- ・ 1646号：7/8 国周「盛遠（團十郎）袈裟（福助）衣川（秀調）」
- ・ 1647号：7/18 芳幾「お岩の霊（菊五郎）伊右衛門（八百蔵）」
- ・ 1648号：7/26 芳幾「尾上（福助）お初（秀調）岩藤（権十郎）」
- ・ 1649号：8/7 芳幾「直助権兵衛（菊五郎）與茂七（菊之助）お袖（栄三郎）」
- ・ 1650号：8/16 芳幾「三平（権十郎）三左衛門（市蔵）お花（栄三郎）」
- ・ 1651号：8/28 年英「頼政鶴を斃す（梧齋年英画）」
- ・ 1652号：9/6 芳幾「市原野（団菊左三優顔合の見立）」
- ・ 1653号：9/17 芳幾「時平七笑い（團十郎）」
- ・ 1654号：9/27 芳幾「愛想盡の場 次郎左衛門（左団次丈）八つ橋（福助丈）」
- ・ 1655号：10/5 芳幾「菊畑の場 鬼一（團十郎丈）智恵内（左団次丈）」
- ・ 1656号：10/18 芳幾「山姥（團十郎丈）山樵（左団次丈）怪童丸（小団次丈）」
- ・ 1657号：10/30 芳幾「保名（團十郎）」
- ・ 1658号：11/10 芳幾「左団次丈薩摩守忠度 権十郎丈岡部六彌太」
- ・ 1659号：11/22 芳幾「景清（團十郎）」(図26)
- ・ 1660号：11/28 富岡永洗「景清（團十郎）一人立 永洗」
- ・ 1661号：12/14 芳幾「袖萩（團十郎）」
- ・ 1662号：12/21 国周「貞任、袖萩（團十郎）宗任（猿之助）」
- ・ 1663号：12/26 鳥居清貞「(不明)」

目次にある口絵タイトルは前号と同じ「貞任、袖萩（團十郎）宗任（猿之助）」となっている。

- ・1664号（第二巻第一号）²¹⁾：明治30年1/11 芳幾「対面難合 工藤左衛門祐経（團十郎）大磯 虎（菊五郎）曾我五郎時致（左団次）」
- ・1665号（第二巻第二号）：1/24 国周「五右衛門（左団次）女房お瀧（秀調）五郎市（権三）」
- ・1666号（第二巻第三号）：1/30 水野年方「斎藤実盛（團十郎）」
- ・1667号（第二巻第四号）：2/8 芳幾「怪猫（菊五郎）」
- ・1668号（第二巻第五号）：2/25 国周「関兵衛（團十郎）墨染（菊五郎）」
- ・1669号（第二巻第六号）：3/12 芳幾「二人袴 高砂尉兵衛 團十郎/右馬之助 染五郎」

さてここまで見てきたように、彩色摺りの口絵、錦絵がこの媒体に掲載されて以降も、やはりその大部分を芳幾が担当していたことがわかる。しかし一方、確実に時は流れており、芳幾の同世代の役者絵の第一人者、豊原国周（1835-1900）だけでなく、弟子世代である右田年英や水野年方（1866-1908、共に月岡芳年門下）、そして富岡永洗（1864-1905）などが台頭してきていることもまた判明する。

先にも述べたように、芳幾は明治7年の「東京日日新聞」錦絵以降、ほとんど錦絵作品を残しておらず、その主戦場は自ら創刊した『平仮名絵入新聞』を始めとする新聞と、この『歌舞伎新報』に代表される雑誌だった。新聞や雑誌の挿絵は、それが単体で流通することがないためなかなか目につかず、美術史としての検討はされにくい。また新聞、雑誌の挿絵の多くは小さな画面で、さらに墨摺り単色であることも等閑視されやすい理由かもしれない。しかし『歌舞伎新報』の編集方針の変更に伴い、1613号以降に彩色摺りの口絵や錦絵附録が導入されたことは、芳幾の錦絵作品を検討、評価するためには幸運であったと言えるだろう。

まず芳幾役者絵の肖似性について触れる。『歌舞伎新報』の役者絵を評価した初出である莊逸楼主人「落合芳幾」²²⁾は、「此人の似顔絵は、国周の筆より最一層突込んで写生した傾きがある」と記す。この評価を鵜呑みにすることはもちろんできないが、幸い、芳幾が描いた明治の歌舞伎役者たちには写真が残されていることから、これと比較することで、モデルに似せようとする意識の有無を知ることができるだろう。また役者のプロマイドである役者絵の宿命として実際の顔貌よりも美化することが暗黙裡に求められるが、肖似性と役者絵の宿命との間のどの地点に、芳幾作品が着地したのかも、この比較によって判明することと思われる。

1621号に掲載された五代目尾上菊五郎の顔貌（図21）と、現在よく知られている菊五郎の写真（図22）とを比較してみる。細い鼻梁、切れ長の目許、とくに二重瞼のライン

や、薄い唇などの特徴が、役者絵として美化されてはいるものの、忠実に描き出されていることが分かる。一方、1626号に描かれた九代目團十郎(図23)と、先に1617号の写真版として掲載された挿図の部分(図24)を比較すると、こちらにもまたモデルの顔貌の特徴を描きとどめていることに気がつく。たとえば菊五郎よりは大きな、しっかりとした鼻、一番の特徴とされる長い顔、そして大きな目。さらに二重瞼の幅や下瞼の隈、口許に刻まれる皺などが、ある種残酷なほどに錦絵に反映されている。さらにそこで改めて、芳幾描く菊五郎と團十郎の顔貌を比べれば、それぞれ違う役者を描いたものだということが明白になるだろう。同時代の代表的な役者絵師国周と比較するならば、芳幾はあくまでも線描による表現にとどまっている点²³⁾は惜しまれるが、肖似性という観点からは高く評価することができる。

次に画面構成を見てみよう。国周役者絵の特徴の一つである役者の半身像による画面を踏襲していることは、先にも述べた通りである。これは、錦絵の約半分という小さな画面であったことも関係しているだろう。芳幾作品の多くが、説明的な事物を廃した無地の背景に役者を一人あるいは二人描いたものになっているが、そこにはいくつかの工夫が見られる。たとえば「福岡貢(菊五郎丈)おこん(栄三郎丈)」(1645号、図25)のように、色紙型をいくつか配置し、その上に役者を描くというスタイルだ。その中でも本図は、淡彩で輪郭線を廃した草花の背景に赤と緑の華やかな色紙型を置き、それぞれ色紙の上に人物を別個に描きながら、しかし握りしめた手紙が二人をつなぐ機知的な構成になっている。また「景清(團十郎)」(1659号、図26)も興味深い作例である。青空を背景に建立中の永福寺が描かれ、その上に紙に描かれた景清の図が重ねられているのである。

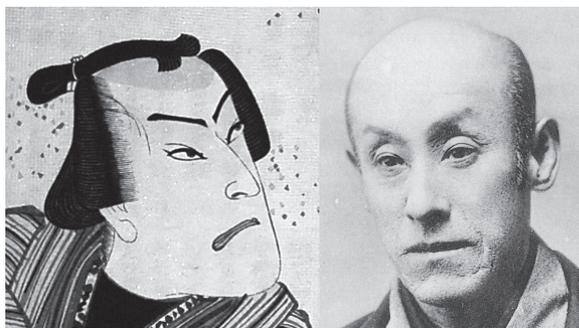


図21 『歌舞伎新報』第千六百二十一号口絵 芳幾「指物師名人長次(菊五郎)娘おしま(福助)の錦絵」部分 明治28年10月29日

図22 五代目尾上菊五郎写真(部分、顔貌) Wikipediaより転載



図23 『歌舞伎新報』第1626号口絵 芳幾「家康(團十郎)長三郎(猿蔵)」部分 明治28年12月19日

図24 『歌舞伎新報』第千六百十七号写真版挿図「仮名手本忠臣蔵 大星由良助市川團十郎」部分 明治28年9月15日



図25 『歌舞伎新報』第千六百四十五号錦絵附録
「福岡貢（第五郎文）おこん（栄三郎文）」
明治29年6月29日



図26 『歌舞伎新報』第千六百五十九号錦絵 芳
幾「景清（團十郎）」明治29年11月22日

4. おわりに

本稿は、近代演劇や近代日本文学の研究では取り上げられてきたものの、そこに掲載されたヴィジュアルイメージについては等閑視されてきた『歌舞伎新報』という雑誌について、初めて美術史の立場から検討したものである。そして主たる関心は、この雑誌に創刊から廃刊までの実に18年の長きに渡り挿絵や口絵、そして錦絵を描き続けた絵師落合芳幾にあった。今回、全1669冊の調査を行ったことで、これまでは殆ど紹介されてこなかった芳幾の後半生における錦絵制作の一端を、紹介することはできたのではないかと考えている。しかしながら、あまりにも大部であったため、『歌舞伎新報』掲載のヴィジュアルイメージを概観するにとどまったことも否めない。同時期に同一の演目に取材した錦絵との比較も具体的には行っていないが、その点については今後の課題とさせて頂きたい。

一方で、今回、この雑誌の調査を行う途上で、日本近代における雑誌媒体の草創期の状況を垣間見ることができたことは、非常に意味深いものとなった。現在、我々がイメージする「雑誌」になる以前の様相を、『歌舞伎新報』の変化を通じて知ることができたからである。日本近代の新聞、雑誌における挿絵文化の中で、多色摺木版の口絵が登場するのは、明治20年代後半、主に30年代に入ってからのものであるという²⁴⁾。一方、『歌舞伎新報』に初めて多色摺りの挿絵（半丁、すなわち1頁分）が登場するのは、明治19年7月（682号）のことであった。してみるとこの『歌舞伎新報』という雑誌は、近代の口絵文化を先取りする存在とも言えるのかもしれない。

註

- 1) 芳幾が創刊に参加した『東京日日新聞』と新聞錦絵については、既に拙稿「落合芳幾研究——「東京日日新聞」錦絵を中心に」（『名古屋芸術大学研究紀要』第38巻、2017年3月）で記している。

- 2) 水野年方とその門下については、岩切信一郎「水野年方とその門下」(『近代画説』9号、明治美術学会、2000年)に、右田年英とその門下については松本品子『挿絵画家英朋——鱒崎英朋伝』(スカイドア、2001年)に詳しい。
- 3) 拙稿「浮世絵師・落合芳幾に関する基礎的研究」『GENESIS (京都造形芸術大学紀要)』20号、京都造形芸術大学、2016年12月
拙稿「落合芳幾研究——「東京日日新聞」錦絵を中心に」(註1)
- 4) たとえば本田康雄「草双紙巻から新聞小説へ——開化期文化の底流」(『国文学研究資料館紀要』14号、1988年)や、越後敬子「其角堂永機の交友圏——細木香以を中心に」(『実践女子短期大学紀要』33号、2012年)など、明治期の新聞雑誌と戯作者との関係について触れた論文に、芳幾の名前が見いだせる。
- 5) 荘逸楼主人「落合芳幾」(『浮世絵』9号、1916年)は「それより功績の大なるは明治八年同志と共に東京絵入新聞を興して、新聞に挿絵を創始した一事は大に特筆すべき事である」と評価する。
- 6) 小野忠重『版画——近代日本の自画像』岩波書店(岩波新書411)、1961年
- 7) 『歌舞伎新報』に芳幾が描いた役者絵を評価した最初は、荘逸楼主人「落合芳幾」(註5)である。また近年における最も充実した芳幾研究である岡本祐美「落合芳幾——その人と画業」(『北海道教育大学紀要』(人文科学・社会科学編)第53巻第2号、2003年)は、芳幾の重要かつ評価すべき仕事として、『歌舞伎新報』に描いた役者絵作品群を挙げておられる。
- 8) 雑誌『歌舞伎新報』は、現在でも雑誌の体裁のまま(一部合本あり)大学図書館などに所蔵されており、本稿で扱うのは京都造形芸術大学芸術文化情報センター(図書館)所蔵本である。またこれはマイクロフィルム資料として公刊されている。
榎原貴教編『明治初期文学雑誌集成1 戯作・歌舞伎編』(マイクロフィルム版)、ナダ出版センター、1993年
- 9) 久保田彦作は明治初期の戯作者、歌舞伎作者。「5代尾上菊五郎付き作者をへて、河竹黙阿弥に師事。明治11年戯作『鳥追阿松海上新話』を刊行。12年『歌舞伎新報』主筆。22年東京歌舞伎座の創立にともない立作者となるが、9代市川團十郎、福地桜痴と不和のため不遇におわった。明治31年1月3日死去。53歳。通称は竹柴幸次、村岡幸次。号は村柑子。』『デジタル版 日本人名大辞典』
代表作である『鳥追阿松海上新話』についてはRatcliff Christian「明治前期における「近代文学」と「近代の文学」の相違——久保田彦作『鳥追阿松海上新話』考」(『人文研究』166号、神奈川大学、2008年)などの研究がある。
- 10) 正本とは「歌舞伎上演用のテキスト。台本。脚本。』『広辞苑』第三版 岩波書店、1983年
- 11) 矢内賢二『明治の歌舞伎と出版メディア』ベリかん社、2011年
加えて矢内氏は、こうした事が可能となった理由として「狂言作者竹柴幸治こと久保田彦作を編集者として要していたという「内縁」がそれを可能にしたのであろう」とする(同書)。
- 12) 條野採菊『千金の涙』。同誌1071~75、1077、1079~82、1085、1086、1088、1090、1091、1093、1094、1098、1100、1103、1107号に掲載。1107号に「次号」とあるが、それ以降連載しておらず未完となった可能性がある。挿絵は水野年方。年方は採菊の息、鑄木清方の師であった。
- 13) この論説についての研究ではないが、森鷗外と『歌舞伎新報』については、目野由希「鷗外「百物語」と『歌舞伎新報』」(『鷗外』91号、森鷗外記念会、2012年)がある。
- 14) 創刊号から1610号まで続いた役者絵を表紙とするスタイルだが、本文中に記した通り、一時(1367~1400号)中断しているので、これを省くと1576冊となる。また、このうち291冊は表紙絵に款記がないため、表紙絵作者が判明するのは1285冊となる。無款の表紙を除いてカウントすれば、芳幾が

担当した割合は92.6%となる。

- 15) 但し1344号（明治25年3月）より1353号（同4月）まで、表紙絵デザインが一部変化する。上の欄（枠）に和歌を記したり、風景表現を付す。1354号よりまた以前の形に戻る。
- 16) 役者絵表紙の復活にあたっては、ここで描く役者の肖像にも企画性を持たせている。復活後の1401号から1409号までは「俳優名家代々鑑」と題して、初代から当代（九代目）の市川團十郎像を表紙とした。その後も断続的に「俳優名家代々鑑」は続き、1415号から1421号までは中村歌右衛門、1427号から1432号までは尾上菊五郎の代々肖像を取り上げている。
- 17) 1521号（明治26年11月）には再び多色刷りの表紙絵を以て刊行し、明治27年正月号（1537号）には多色刷りの附録を付す。また1550号の社告には「例の彩色似顔畫表紙を以て」と宣伝し、1551号（同年2月）、1561号（同年3月）の表紙を多色刷りにすると告げている。但し1561号の表紙は多色刷りとはなっていない。なお、1500号以前においても、たとえば新年号の附録双六（736号、明治20年）や三世中村仲蔵追悼の記事を載せた682号挿絵（明治19年）など、多色刷り印刷の絵は雑誌に綴じ込まれている。
- 18) 本田康雄「草双紙合巻から新聞小説へ——開化期文化の底流」（註4）
- 19) 小島烏水「豊原国周評傳」（同氏『江戸末期の浮世繪』所収）、梓書房、1931年
- 20) 但し目次を確認すると、1658号目次には一号のみ「口絵」と記され、続く1659号以降は「錦絵」と表記されるようになる。
- 21) 表紙は「千六百六十四号」と記されるが目次には「第二卷第一号」とある。以降、1669号（第二卷第六号）まで同様の表記。
- 22) 註5)を参照
- 23) 国周役者絵は、薄い色彩を用いた面的な表現を以て、顔貌の立体感の描出に成功している。拙稿「豊原国周研究——大首絵の構図を中心に」『GENESIS』19号、京都造形芸術大学、2015年
- 24) 青木茂「明治期挿絵美術の素描」『美学・美術史学科報』24号、跡見学園女子大学、1996年

掲載図版目録

- 図1 『東京絵入新聞』明治20年11月19日号紙面 『ニュースの誕生』（東京大学総合資料館、1999年）より転載
- 図2 『歌舞伎新報』創刊号表紙 明治12年2月3日、京都造形芸術大学芸術文化情報センター（以下、雑誌『歌舞伎新報』の所蔵はすべて同センター）
- 図3 『歌舞伎新報』第七号表紙 明治12年4月4日、同所蔵
- 図4 『歌舞伎新報』第千三百二十一号社告 明治25年1月8日、同所蔵
- 図5 『歌舞伎新報』第四十九号表紙 明治12年12月12日、同所蔵
- 図6 『歌舞伎新報』第千二百四号表紙 明治24年1月4日、同所蔵
- 図7 『歌舞伎新報』第千二百四号附録「歌舞伎新報初刷附録/わらひぞめ」明治24年1月2日、同所蔵
- 図8 『歌舞伎新報』第千三百六十七号表紙 明治25年5月23日、同所蔵
- 図9 『歌舞伎新報』第千五百号表紙 明治26年8月17日、同所蔵
- 図10 『歌舞伎新報』第千六百十三号表紙 明治28年8月2日、同所蔵
- 図11 『歌舞伎新報』第千六百二十八号表紙 明治29年1月10日、同所蔵
- 図12 『歌舞伎新報』第千六百六十四号表紙 明治30年1月11日、同所蔵
- 図13 『歌舞伎新報』第六百七十二号挿絵（芳幾） 明治19年6月19日、同所蔵
- 図14 歌川国貞『修紫田舎源氏』第十一編挿絵、天保5年（1834）、国立国会図書館蔵（同館デジタル化）

資料より転載）

- 図15 『歌舞伎新報』 第千六十五号折り込み 明治22年11月10日、京都造形芸術大学芸術文化情報センター
- 図16 『歌舞伎新報』 第千六百十四号写真挿図（「関の扉」） 明治28年8月15日、同所蔵
- 図17 『歌舞伎新報』 第千六百十三号口絵 芳幾「御存幡随長兵衛 團十郎の長兵衛、権十郎の権八」 明治28年8月2日、同所蔵
- 図18 『歌舞伎新報』 第千六百二十二号口絵 「市川團十郎丈の暫」 明治28年11月8日、同所蔵
- 図19 豊原国周「歌舞伎十八番之内 暫 市川團十郎」 明治28年、京都造形芸術大学
- 図20 『歌舞伎新報』 第千六百二十八号錦絵附録 芳幾「團十郎、菊五郎、左団次、丑之助の靉猿」 明治29年1月10日、同所蔵
- 図21 『歌舞伎新報』 第千六百二十一号口絵 芳幾「指物師名人長次（菊五郎）娘おしま（福助）の錦絵」 部分 明治28年10月29日、同所蔵
- 図22 五代目尾上菊五郎写真（部分、顔貌） Wikipedia より転載
- 図23 『歌舞伎新報』 第1626号口絵 芳幾「家康（團十郎）長三郎（猿蔵）」 部分 明治28年12月19日、同所蔵
- 図24 『歌舞伎新報』 第千六百十七号写真版挿図「仮名手本忠臣蔵 大星由良助 市川團十郎」 部分 明治28年9月15日、同所蔵
- 図25 『歌舞伎新報』 第千六百四十五号錦絵附録 「福岡貢（菊五郎丈）おこん（栄三郎丈）」 明治29年6月29日、同所蔵
- 図26 『歌舞伎新報』 第千六百五十九号錦絵 芳幾「景清（團十郎）」 明治29年11月22日、同所蔵

【資料1】『歌舞伎新報』月次発行冊数一覧

明治12年 1879	明治13年 1880	明治14年 1881	明治15年 1882	明治16年 1883	明治17年 1884	明治18年 1885	明治19年 1886	明治20年 1887	明治21年 1888	号数
1月	5	6	6	7	6	11	11	10	9	736-745.736附録
2月	5	5	5	6	11	374-378, 374附録	498-507, 498附録	616-625.616附録	10	856-864
3月	5	5	5	6	11	379-389	508-517	626-635	10	865-874
4月	5	5	5	6	11	390-399	518-527	636-645	10	875-882
5月	5	5	5	6	11	400-411	528-537	646-655	10	883-893
6月	5	5	5	6	11	412-422	538-550	656-665	10	894-904
7月	5	5	5	6	11	423-432	551-559	666-675	10	905-913
8月	5	5	5	6	11	433-442	560-569	676-685	11	914-923
9月	5	5	5	6	11	443-454	570-578	686-695	9	924-932
10月	5	5	5	6	11	455-464	579-587	696-705	9	933-938
11月	5	5	5	6	11	465-475	588-596	706-715	11	939-948
12月	5	5	5	6	11	476-488	597-606	716-726	10	949-958
計	65	80	81	99	125	119	121	120	113	846-855
※明治12年2月創刊										

明治22年 1889	明治23年 1890	明治24年 1891	明治25年 1892	明治26年 1893	明治27年 1894	明治28年 1895	明治29年 1896	明治30年 1897	号数	
1月	10	10	8	8	9	1537-1545	3	1628-1630	1664-1666 (二巻一号~三号)	
2月	12	10	9	10	8	1546-1553	3	1631-1633	1667-1668 (二巻四号, 五号)	
3月	12	10	14	9	8	1554-1561	3	1634-1636	1669 (二巻六号)	
4月	12	10	9	9	10	1562-1571	3	1637-1639		
5月	10	10	9	9	7	1572-1579	3	1640-1642		
6月	10	10	9	9	8	1580-1586	3	1643-1645		
7月	10	9	10	8	9	1587-1595	3	1646-1648		
8月	9	10	10	9	7	1596-1602	3	1649-1651		
9月	9	10	9	8	5	1603-1607	3	1652-1654		
10月	10	10	9	7	2	1608-1609	3	1655-1657		
11月	10	10	9	9	2	1610-1619	3	1658-1660		
12月	9	7	8	8		1620-1624	3	1661-1663		
計	113	117	113	103	73	1625-1627	36	6		
1月新年号附録 1610号(3/3),リ ニューアル刊行。 1611号より全面リ ニューアル。11月号 外刊行。 1609号の後、半年く らい刊行が空く。										
4月以降、刊行されず。										

【資料2】歌舞伎新報に筆を執った絵師たち

凡例：絵師名の掲載順は本雑誌の登場順とする。各項目の数値は号数を意味する。

絵師名	絵師備考	表紙絵	件数	挿絵	件数	附録、口絵など	件数
三代鳥居清満	天保3年～明治25年 (1832-92) 二代目清満門人、息	1, 2, 4, 8, 505+B5: C22+B5: F8	5	6	1		
鳥居清種	天保3年～明治23年 (1832-90) 二代目清満門人	27, 36, 38, 45, 67, 69, 206, 452, 554, 909, 1048	11	66, 68, 89, 97, 766	5		
鳥居清貞	弘化元年～明治34年 (1844-1901) 歌川国芳、三代清満門人	297, 312, 374, 387, 399, 477, 660, 1323, 1401, 1561	10	838, 1377, 1663	3	挿絵附録：1663	1
落合芳幾	天保4年～明治37年 (1833-1904) 歌川国芳門人	49, 50, 117, 117附録, 121, 122, 125, 134, 136, 137, 139-141, 144-146, 148, 149, 151, 153-155, 159, 161, 162, 164-168, 171-181, 187, 189, 190, 192, 196附録, 198-210, 212-215, 217-234, 236-242, 244-246, 248-250, 252, 253, 255-265, 267-276, 276附録, 279-296, 298-311, 313-320, 322-342, 344, 345, 347-370, 374附録, 378-386, 388-398, 400-405, 407-429, 431-451, 453-474, 476, 478-480, 482-498, 498附録, 499-502, 506, 507, 510, 511, 513-516, 518, 519, 521-553, 555-587, 589-616, 616附録, 617-693, 695-776, 778-786, 788-797, 799-813, 815-889, 891, 892, 894-901, 903-905, 915, 919, 921, 925-931, 940, 941, 943, 945-947, 949-953, 955-962, 964-970, 972-979, 982-993, 996, 999, 1000, 1000附録, 1002, 1003, 1005-1014, 1016-1022, 1034, 1035, 1045-1047, 1052, 1053, 1055-1057, 1059-1094, 1096-1104, 1106-1113, 1115-1119, 1121-1146, 1150-59, 1161-1165, 1168, 1169, 1171-1173, 1175, 1176, 1178-1190, 1192-1197, 1199-1273, 1275-1284, 1286-93, 1295-1303, 1305-1311, 1313, 1317-1320, 1343, 1344, 1346, 1347, 1349, 1351, 1353-1366, 1402-1411, 1413-1421, 1423-1435, 1437-1446, 1448, 1450-1456, 1458-1462, 1464, 1466-1468, 1470, 1471, 1474-1485, 1487-90, 1492-1495, 1497-1499, 1501-1507, 1510, 1513, 1514, 1516-1519, 1521, 1523, 1525, 1526, 1528, 1530-1540, 1542-1544, 1546-1553, 1556-1560, 1564-1566, 1572-1578, 1583, 1585-1588, 1591, 1592, 1595-1604, 1610	62, 83, 86, 113, 142, 144, 145, 148, 153, 154, 159, 160, 177, 193-196, 196附録, 197-199, 201-204, 206-208, 210-214, 223, 225, 228, 236, 238, 241, 243, 246, 249, 250, 252, 259, 268, 271-273, 275, 276, 276附録, 278, 283, 285, 287, 288, 295, 300, 301, 310, 314, 319, 331, 336, 350, 352, 356, 358, 359, 361-366, 368-374, 374附録, 379, 383, 386, 389, 392, 396, 399, 400, 403-406, 409, 419, 441, 446, 481, 483-485, 527, 551, 586, 587, 610, 628-631, 633-635, 638, 640, 642, 644, 645, 648, 652-654, 658, 661, 664, 665, 669-674, 678, 682, 685, 688, 693, 713, 717, 725, 732, 734-736, 739, 741, 745, 748, 754, 755, 758, 766, 768-770, 772, 775, 776, 779, 793, 795, 804, 805, 811, 820, 826, 827, 829, 834, 843, 845-878, 880-892, 895-907, 914, 916, 918, 919, 921, 927-931, 941, 942, 944-948, 951, 953, 955-963, 965-971, 973, 979, 983-990, 1000附録, 1004, 1007, 1009, 1010, 1012, 1025, 1050, 1054-1056, 1059, 1060, 1062, 1065-67, 1069-1081, 1082-1089, 1093-1113, 1115-1133, 1138, 1141, 1142, 1145, 1146, 1149-1153, 1156, 1158, 1159, 1161-1163, 1165-1169, 1172, 1174-1194, 1196-1198, 1200-1203, 1283-1285, 1294, 1304, 1314, 1359-1361, 1368, 1370-1375, 1379-1385, 1387-1389, 1391, 1392, 1394-1404, 1406-1410, 1412, 1413, 1415, 1416, 1418, 1419, 1421-1428, 1430-1435, 1437-1443, 1446, 1449, 1450, 1453, 1458, 1466, 1471, 1473, 1476, 1479, 1482, 1484-1486, 1488, 1489, 1500, 1536-1538, 1541, 1546, 1457, 1474, 1478, 1479, 1483	505	口絵：1613-1627, 挿絵附録：1628-1639, 1641, 1642, 1644, 1645, 1647-1650, 1652-1659, 1661, 1664, 1667, 1669	15附録32	

歌川国峯	文久元年～昭和19年(1861-1944) 二代歌川国久門人、息		495	1			
豊原国周	天保6年～明治33年(1835-1900) 三代歌川豊国門人	508, 509, 512, 517, 520	5	0	錦絵附録：1640, 1643, 1646, 1662, 1665, 1668	6	
小林幾英	生没年不詳、芳幾門人		603	1			
歌川芳春	文政11年～明治21年(1828-88)歌川国芳門人		605-627, 632	24			
河鍋曉齋	天保2年～明治22年(1831-89) 歌川国芳、狩野洞白門人		616附録	1			
歌川国松	安政2年～昭和19年(1855-1944) 歌川国輔門人	907, 908, 910-914, 916-918, 920, 922-924, 932-934, 936-939, 942, 944, 948, 954, 981, 994, 995, 1004, 1023, 1025, 1027, 1028, 1030, 1036-1042, 1174, 1177, 1312, 1524, 1562, 1567, 1568, 1606	48	5	935, 940, 943, 975, 981		
(高畠)兼彦	生没年不詳、明治の文人高畠藍泉(三代目柳亭種彦)の息	1026		1			
水野年方	慶應2年～明治41年(1866-1908) 月岡芳年門人			0	1071, 1073, 1077, 1079, 1080, 1085, 1086, 1088, 1089, 1090-1093, 1095-1103, 1107	1	錦絵附録：1666
小山光方	生没年不詳、年方門人		1093	1			
右田年英	文久3年～大正14年(1863-1925) 月岡芳年門人	1321, 1324, 1325, 1327, 1329-1331, 1333, 1348, 1605, 1609	11	1	1321	1	錦絵附録：1651
四代島居清忠	明治8年～昭和16年(1875-1941) 清貞息	1581, 1589, 1607	3				
富岡永洗	元治元年～明治38年(1864-1905) 小林永濯門人						錦絵附録：1660

※1367号から1400号まで役者絵の表紙を廃止。
※1610号以降は役者絵の表紙が廃止。